まちづくりひろしま

被爆１００年(西暦2045年)の姿をめざして

第１２号(平成２６年７月１５日)

読者数：４８２名（募集中）
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ： hirosima.idea.c@urban.jp
〒733-0002　広島市西区楠木町 1-9-7
発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二
配信元：広島アイデアコンペ実行委員会
ご提案・ご意見等は、こちらまで

□巻頭言

哲学は遺言書

ガリバープロダクツ代表
編集委員
通谷　章

私は哲学が好きだ。哲学はある意味、遺言でもある。

街づくりにも哲学が必要である。哲学に乏しい街は、どことなくうすら寒い。単なる人工物としか映らない。哲学の解釈は多岐に渡る。だが、多岐に渡った解釈を一つずつ削いでいくと骨太の心理が横たわっている。人間の尊厳、生きるべき示唆、命の畏れ…大げさに言えばこんなことになる。

一方、悠遠な課題だけに、様々な論法が成り立つ。言いたい放題、勝手気ままというのも哲学である。上から見て、下から見て、それだけでは飽き足らない。横からや斜めから見ても構わないという感覚である。要は、うがった見方も容認してしまうわけである。

たとえば月を見る。私の傍らの女がこう言う。「今夜は満月よ、夜空をあんなに輝かせているわ」とか、「今晩の三日月ってとてもきれい。ムードがあって、しかも神秘的。私、三日月を見るのが好きよ」なあんて。冗談じゃない。だが、答えは一つである。

改めて女を見ると、そこそこ美形だが、薄っぺらである。顔に塗った表装を一枚剥ぐと多分正視に耐えない。さらによく見ると、どこかしら目が濁っている。傍らの女に限らない。

人はさまざまに月を見る。月はいつだって満月である。三日月や半月は、そう見らされているだけに過ぎない。

さてさて、街を見る。機能的、合理的、利便性の高い建物がたくさんある。しかし、創作者の心意気が伝わってくる遺言的な建物は数少ない。私を痺れさせてくれる哲学を感じさせない。

現在を生きるため、やむなしと理解しているが、自分の住む街が面白く、誇らしく、心底愛せるには「何かが足りない」と、つい口に出してしまう。

哲学を理解しにくい人物を列記してみよう。官僚、政治家、経営者、文化人、学者、経済評論家…加えて哲学者。概ね、世に害を流している人物が多々含まれていることが分かる。

方や、哲学を理解しやすい人物（それ以外も含む）を列記してみよう。子ども、老人、動物、植物、昆虫…加えて種田山頭火のような人物。

どうだろう、頷けるであろうか。

仮に、建築物の連鎖が街づくりなら、そして創作者並びに関与した人々の大なり小なりのモニュメントが街づくりであるなら、もう少し違う作り方があるのではないか。

自分が生きた証を、自分の生き様を大地に記すには、もっと厚い知恵が込められた大胆（精神的に）な表現があってもいいのではないか。街を哲学にして欲しい。街を遺言書にして欲しい。

街づくりに関わる人たちには、この土地に自己を総決算する生涯の楔を打って欲しい。私は、街を歩きながら、こう何度か叫んでいる。

再度、記す。私は哲学が好きだ。学生時代、一般教養科目で唯一「優」をいただいたからであろうか。

ひろしまのまちづくりの動き

○広島駅北口、二葉の里国有地完売！

３社が計画する予想図

広島駅北口の二葉の里再開発地区の最後の国有地「５街区」が広島テレビ放送、エネルギア・コミュニケーションズ、大和ハウス工業の３社グループに売却された。

これで都市再生機構が２０１０年から着手した二葉の里地区の再開発事業の全容が固まった。１街区は広島東警察署と不動産業の日本アイコム、２街区は家具メーカーのイケア・ジャパンと総合スーパーのイズミ本社、３街区は広島県の医療施設と県歯科医師会、４街区はＪＲの病院建替え、５街区は今回の３社グループとＪＲ西日本広島支社の建替え計画である。

中国新聞(5/21)より

５街区は広島の陸の玄関口に相応しいまちづくりが求められ、エネルギアは１０階建てのデータセンターを、広島テレビは９階建ての新社屋を、大和ハウスは地下１階・地上２３階建ての複合ビルを建設し、２０１６年～２０１９年に完成予定。複合ビルはホテルやオフィス、商業施設、長距離バスの乗降所等を備え、敷地中央に駅方面から二葉山方面に抜ける二葉の里通りを設けている。

すでにイズミ本社はオープンし、３街区は２０１５年開業を目指して工事中である。南口のＢ・Ｃブロックの再開発ビルも２０１６年の完成を目指している。北口と南口を連絡する自由通路も２０１８年に完成予定で、駅舎は橋上駅になる。広島高速５号線は北口広場まで開通を見込み、南口広場は広電の新路線「駅前大橋線」の高架乗り入れの検討が進められている。

＊コメント＊

駅周辺のポテンシャルが急速に高まり、市の中核エリアである紙屋町・八丁堀地区の地盤沈下傾向が加速する恐れがある。そうならないために駅周辺の集客力アップと中心部の魅力アップの相乗効果が期待できるよう先手を打つ必要がある。

市も中心部と駅周辺をコアにした楕円形の都心づくりを推進している。各コアを充実させ、結びつきを強化するため、中央公園のビジョンと広電の新路線問題の解決が急がれる。

（編集委員　瀧口信二）

○路面電車の広島市中心部循環ルート案の検討！

昨年、ＪＲ広島駅に乗り入れる広電の新路線「駅前大橋線」構想とそれに伴う比治山線の新ルート案が発表された。

駅前大橋線は駅前大橋から高架で広島駅南口広場に入り、広島駅ビルの２階部分につなげる。その際、駅ビルは建て替える予定。

比治山線の新ルートにより、現ルートにある３つの電停は廃止される予定であったが、的場町と段原１丁目の電停付近の住民達から電停の存続と回遊性向上のため、循環ルートの提案があった。

循環させることにより、紙屋町経由宇品線と比治山線を乗り換えずに中心部から比治山方面に行くことができるし、その逆も可。

中国新聞(4/19)より

広島市も広島電鉄も前向きに検討することで一致しているが、残念なことに広島駅を経由していない。この際、広島駅経由の循環ルート案も検討する必要がありそうだ。現比治山線を残し、猿猴橋町電停から高架で駅南口広場につなげば、駅前大橋線に接続可能と思う。そうなれば高架の駅南口広場経由の循環ルートが可能である。

（編集委員　瀧口信二）

○広島の復興の軌跡（第７回）・・・広電の軌道移設と本格的復興について

はじめに

広島における都市生活は路面電車とともに歩んできたともいえる。それは明治末における外堀の埋め立てによる軌道敷設から始まり、次第に路線が拡張され、広島の都市構造を変容させる役割も果たしたが、被爆という著しい被害に見まわれたことにより、全く特別の歴史的な過程を歩ませたのである。

被爆からの復旧については、広島電鉄【参考文献１】によって次のように記述されている。すなわち、「昭和 20 年８月６日、原爆が投下され、広島市は壊滅状態となり、広電も全線にわたって不通となった。しかし、9 日には西天満町―己斐間がはやくも復旧運転をしたのをはじめ、終戦とともにわずかずつながら復旧区間が延長されて、10 月には本線全線で電車が運転されるようになった」と。確かに、電車車両や架線、軌道等の物的な大被害だけでなく、著しい人的被害をこうむった広島電鉄が、早い時期に復旧を果たしたのは、優れた使命感と職業倫理を有していたこと､架線の改修などをやり遂げれば早期の復旧を可能にする路面電車という強靭性、当時の被爆から復興しようという市民生活に極めて有効なシステム、等を証していた。よって、電車を通して広島の復興を考察することが切に望まれるが、ここではあえて後の時期にずらせて、もう一つの重大問題に言及することとする。（通りの名称は現在に合わせている）

１．道路拡幅による軌道の移設

広島が復興計画において、それまでの道路を大幅に拡大して新たなネットワークを形成しようとしたことは認識されていることであろう。それまで幅員 20m に満たない道路が、相生通りや鯉城通りなどの幹線は 40m に拡幅されたのであるから、飛躍的に拡福された道路計画であった。ところが、道路が拡幅されたとき、それまでのセンターラインで運行されていた電車の軌道はどうなるのであろうか。やはり原則的にはセンターラインに位置していなければ、交通条件上極めて不都合となるであろう。道路拡幅が両側に同寸法でなされない限り、軌道をどちらかに動かす必要性がでてくる。

軌道移設といっても簡単なことではない。移動そのものの工事の大変さもあるが、何しろ運行をしながら移設するのであるから容易なことではない。写真を見て明らかなように、その過程で軌道が不規則になり、電停が何度も移動するなど、一筋縄に行かなかったのである。

２．福屋旧館問題

さらに問題はそれ以前にある。道路を拡幅することにおいて困難を極める場合があるからである。その最大の事例が、相生通りに関わる福屋旧館問題であった。現在の福屋の北東、八丁堀と立町電停間において、北側から福屋旧館が立ちふさがるように建っていて、北側に道路を拡幅するためには立ち退き・解体を迫るしかないが容易に決着が付かなかった。一時は福屋旧館の下部を切り抜き、人車が通れるようにして軌道も移設してしまおうという考え方も浮上した。しかし当時の道路法のもとでは、道路上に建物は存在することは許されないことであった。安全性が確保されず、不安定でどうやって支えるのか、解決できない問題であった。結果的には解体されることになったが、解体工事が遅くなり、その両側では道路敷地が確保されているのに、1953 年頃まで福屋旧館部分だけが存続している姿をさらけ出していた。

３．白島線

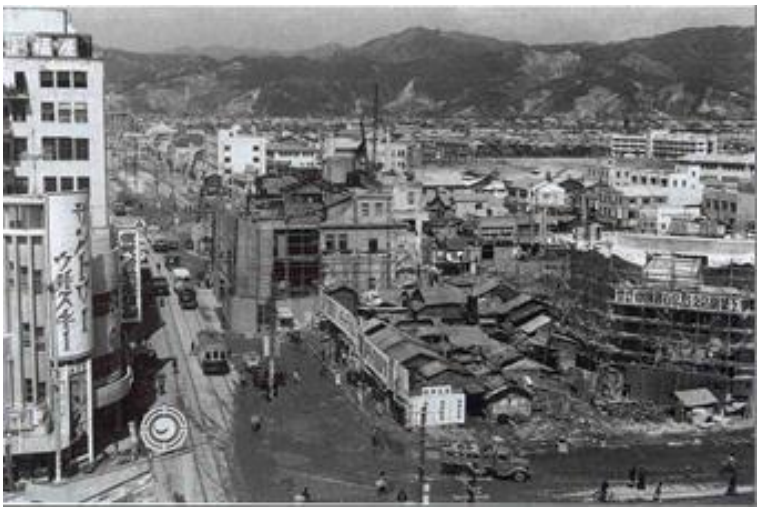
全く新たな軌道移設は白島線であった。すなわちここではセンターラインの移設ではなく、まるごとの移設であった。それはかつて福屋旧館の西側から白島まで八丁堀筋において運行されていた白島線が現在の白島通りが新設されたことにより、まるごと移設することになったのである。これは中央通りから北上する白島通りを区画整理に合わせて構築し、その中央に複線の軌道を新設するのであるから、運行しながらの軌道移設と違って同時進行であった。その白島線も 1952 年６月開通した。

４．鯉城通り

鯉城通りの場合は 15～19ｍの道路を西側に拡幅することになったが、西側には鉄筋コンクリートのような堅い建物がほとんどなく、市役所付近の道路拡幅は進み、軌道の移設が 1956～７年にかけて鷹野橋付近までなされた。相生通りの十日市地区の移設も忘れられない光景である。

このように、軌道移設は戦後の復興期における広島における一大事業であり、これが終了する頃広島の復興をある程度実感させる光景となったのである。

（編集委員　石丸紀興）



写真（左上）**（参考文献２）**
1953 年八丁堀の福屋旧館が相生通りにはみ出したままでその扱いで難渋している状況がわかる。

写真（左中）**（参考文献３）**
1953 年撮影、八丁堀から東方面を望む、相生通りは北側に拡幅することになったが、立ち退きが進まない家屋の存在によって軌道移設は中断され、戦前の道路幅員しか機能していない状態である。

写真（右中）**（参考文献３）**
1956 年、現在鯉城通りで市役所前付近から北望、それまでの 15～19ｍ幅員の道路を西側に拡幅して 40m に拡幅することにした。車の車線の一部は既に西側に移っている。

写真（下）**（参考文献４）**
1953 年頃、当時の商工会議所から相生通りを十日市方面へ望む、旧軌道と新軌道が曲折しながらつながり、蛇行する軌道は、さながら軌道移設の困難さを表現しているような光景である。

参考文献（１～４）

１．企画飯島巌、解説青野邦明、写真荒川好夫「私鉄の車両３／広島電鉄」（保育社、1985）p. v

２．被爆 50 年記念史編集研究会編「被爆 50 周年図説広島市史／街と暮らしの 50 年」（広島市総務局公文書館発行、1996）p. 55

３．広島市都市生活研究会編「広島被爆 40 周年／都市の復興」（広島市企画調整局文化担当発行、1995）p. 67

４．広島市編集「図説広島市史」（広島市発行、1989）p. 167

○時代を語り建築を語る会（第５回）：大田晋氏

大田晋氏が「広島の都市美」を語る。1980 年から 3 年間、広島市荒木市長のもとで全国に先駆け「広島市都市美計画」策定の中心的役割を果たした。

・主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表：石丸紀興）
・日時：2014 年 5 月 23 日（金）18：00～20：00
・場所：広島市まちづくり市民交流プラザ

略歴：1947 年広島生まれ、1971 年東大卒、1980 年厚生省から広島市出向、1996 年広島市助役、現在、川崎医療福祉大学教授

＜話の概要＞

☆　都市美感覚
・個性なき街は魅力なし。歴史なき街は魅力が薄い。
・地形、自然、風土を取り込んだ都市が美しい。
・国民、住民の美的感覚の違いが大きい。広島は？
・都市（美）は時間をかけて出来上がるもの。

撮影　松本富美

☆　都市美の実践
・元安川河床美化・・・一人で元安川平和公園辺りの元安川を見に行く。そこに散らばる瓦礫を見て「広島の川はこうではなかったはず。元の姿に戻すぞ」と決心した。
・女学院藤棚・・・城南通りの魅力づくり。女学院の生徒と藤の花は似合う。広島駅まで伸ばしたかった。
・RCC アンテナと航空法・・・街の中心に赤白マダラ模様はふさわしくない。国際条約と航空法による規制。安全至上主義　⇒青白マダラ模様に変更
・その他・・・旧陸軍糧秣廠の保存・活用⇒郷土資料館／土屋病院看板不設置交渉／中央郵便局セットバック／マンション給水塔等のカバーなど

☆　今後の広島の都市美づくり
・広島の天与の自然、歴史、文化、風土を街づくりに取り込み、生かすこと。特に中心部を流れる「6 本の川」を生かす。→「泳げる太田川づくり」
・電柱電線地下埋設、看板広告規制・・・陸の玄関口、広島駅前の景観はこれで良いのか？
・建物の色彩など・・・市の景観計画で取組む。屋根のソーラーが心配。瓦型ソーラー開発。
・人口減少、高齢化を折り込んだ街づくり・・・逆ドーナッツ現象。都心回帰への対応。

☆　都市美（行政）を進めるためには
・市長をはじめとする幹部が「都市美」に対し明確な価値観を持つこと。
・職員の美意識の涵養・向上。採算性・効率性ばかり求めてきた戦後行政の価値観の転換。
・美しくなければ意味がない、という価値観の共有（市民、行政、業界）が必要。
・時間をかけて、諦めないで少しずつ進め、成果を蓄積して行くことが重要。

☆　**「都市美づくり」は　住民エゴ・無理解層、効率・コスト一辺倒の業者、市民、もっともらしい景観学者、議員、自称平和市民派などとの「せめぎ合い」である。**
また、行政側の努力、説得力、粘り、郷土愛が不可欠。

＊コメント＊

論理明快、エネルギッシュな語りは現役時代の大田節を思い起こす。自らが先頭に立ち、果敢に現場に出向く姿勢は多くの参加者を感動させた。行政主導の都市美づくりは多大な成果を挙げてきた。これから本物の都市美づくりは「市民主導への転換」と云えよう。

（編集委員　高東博視）

○人物登場：隆杉純子氏（ポップラ・ペアレンツ・クラブ代表幹事）

野外上映会のチラシを手に

撮影（2004 年 7 月）前田文章

はじめての女性登場。ホテル・フレックス１階のカフェテラスで、京橋川からの爽やかな風が心地よい。おもむろにバッグからパソコンを取り出し、この中に言いたいことが詰まっているという話からインタビューがスタートした。

☆プロローグ

生まれも育ちも広島。30 代から 40 代前半まで東京の駒沢公園近くに住み、みんなが公園で楽しんでいる光景を見ていた。広島に帰って初めて広島の良さに気付く。特に川沿いの開かれた空間は素晴らしい。パリの川岸には分かりやすい「通りの名前」が付いていることをフランス人から教わったことが印象深く残っていた。

そこで広島の川沿いの道に名前を付けることを思いつき、職場の人に話すと、広島市が推進している「水の都ひろしま」の市民活動助成事業に応募するよう勧められる。よく分からぬままに申請し助成を得て、３か所の川沿いの道の愛称を市民に公募する。その結果、基町環境護岸の一部に「基町ポップラ通り」という愛称をいただく。

☆ポップラ・ペアレンツ・クラブ設立の経緯

ここになぜ１本のポプラの木が立っているのか、周辺のことを調べていた時、2004 年 9 月に台風でポプラが倒れ、官と民が協力して植え直す。これを機にポプラの再生を見守っていくために集まった市民と企業のボランティア団体として、2006 年 7 月にポップラ・ペアレンツ・クラブ（略称：ＰＰＣ）が発足した。

基町環境護岸の管理者である国土交通省太田川河川事務所と管理協定を結び、毎月第４土曜に基町ポップラ通りの清掃と草刈りをする代わりに、野外上映会などイベントが可能となる。現在、管理は広島市緑政課に移行した。

☆ＰＰＣの運営

清掃と草刈りの道具やガソリン代など必要経費は管理者の市が負担し、ＰＰＣメンバーはボランティアで汗を流している。除草されたきれいな緑地を見渡すとき、達成感で一杯だ。

ＰＰＣと広島市映像文化ライブラリー共催の野外上映会は、この夏、7 回目となる。スクリーンの設営、映画の上映に関する費用は映像文化ライブラリーが担当し、それ以外の会場設営や広報、参加募集、実際の現場作業をＰＰＣが行っている。企業から協賛を募り、映画鑑賞者には任意で参加費 500 円をお願いして、なんとかやり繰りしている。

☆ＰＰＣの活動のエピソード

基町環境護岸の設計者・中村良夫東工大名誉教授から「ポプラを残すためにデザインした」と伺い、感動した。また、漫画『夕凪の街　桜の国』の原作者、こうの史代さんと出会ったことがＰＰＣの活動に弾みがついた。さらに、映画撮影のロケ地にこの場所が使われたことが野外上映会を始めるきっかけとなる。２回目にはゲストとして佐々部監督、主演女優の麻生久美子さん、こうの史代さんを迎え、トークショーを実施。広島生まれのこうのさんの協力で、初代のベビーポップラ（ひこばえ）が東京の平和の森公園に植樹された。別の里親に育てられた２世のひこばえが今年２月に里帰りし、現在の３代目として風景をつくる大役に挑戦している。

☆これからの目標

最近、基町ポップラ通りに魅かれてイベントをする若い人が増えた。結婚式、アースデイひろしま、green ground market（ggm）などの会場となり、ＰＰＣはそのサポートに徹する。楽しく利用されることによりその場所に愛着が芽生え、使う人のマナーがよくなっていく。これからも河岸緑地の素晴らしさを次の世代に伝えていきたい。

▼ポップラ・ペアレンツ・クラブホームページ： http://poplaparentsclub.web.fc2.com/

▼野外上映会「おまえうまそうだな」：8 月 2 日（土）、17:30 開場、子供連れで是非ご来場を！

＊コメント＊　会社員の一女性がこれだけアクティブに活動できる秘訣は、人柄であろう。人とのつながりに恵まれたという。まだまだポップラ物語は続きそうだ。

聞き手：編集委員　前岡智之、瀧口信二（文責）

○アイデアコンペの中から提案！

２０１１年に行った広島市中央公園アイデアコンペの提案作品の中からこのエリアを考えるうえで貴重な提案、アイデア等を紹介していく。

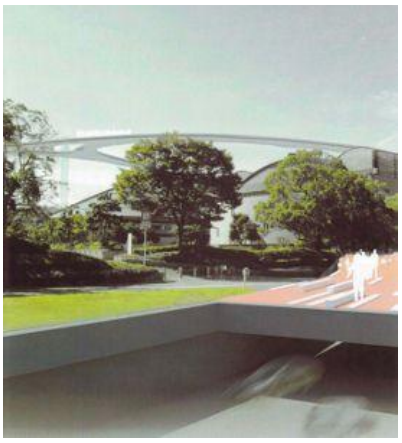
・作品番号６４「Sustainable Urban Metabolism」

平和公園が世界平和のシンボルの静の公園に対して、中央公園は現在の広島の生活や市民のシンボルとなる動の公園と位置づけ、未来に向けて成長し続けるための新しい基盤と人々の意識を生むデザインとして、次の３つを提案している。

・自然と向き合うために公園内を横断する道路を地中化して緑の一体化を図る。また、公園内に川から水を引き入れ、人工の入り江を設けて川との関係を強める。

・既存の施設を見直し、新たな中枢機能として音楽を加え、教育・芸術・音楽の３つの軸を持った文化エリアを生む。市民球場跡地はマーケットスペースを設け、新しい人の集まりや流れを作る。

・公園内を横断する橋を架け、その橋上に市内を望む展望スポットを設ける。平和公園と基町高層アパートと広島城を結び、広島の歴史と空間をつなぐことにより、公園に新たな動きを与える。



公園内の道路を地中化

公園内を横断する橋

***提案者：杉田　宗氏（杉田三郎建築設計事務所）のコメント＊**

長年に渡り様々な建築に関わり、広島の発展や変化を見守ってきた弊社にとって、本コンペへの参加は、今後広島が直面する様々な問題を認識する重要な機会となりました。今後、広島の街も社会の劇的な変化に対応した更新が必要です。21 世紀の都市に必要なのは、消費エネルギーやメンテナンスに限定した持続可能性ではなく、街の様々な活動の持続性であり、それをデザインできる人材が都市の形成に大きく影響すると考えています。都市の復興の姿を世界に伝える広島で、我々も次の時代に向けた新しいまちづくりに関われないかと、前に向かっています。

□ほっとコーナー　『フルムーン旅行』

折見　保則（エル設計）

先日、梅雨空の中、東北旅行に出かけた。広島から秋田までは新幹線、秋田からはバスに乗って、男鹿半島、津軽半島、下北半島そして三陸海岸を回り、角館に到着。角館から広島までは新幹線という行程である。広島から秋田までが約 1500km、バスに乗っている距離が約 1100km、帰りの距離を合わせると約 4000km の旅であった。

北山崎の展望台から
太平洋を望む

東北地方にはいたるところに温泉があり、新鮮な食材がある。美味しいものを食べながらの温泉三昧旅行であった。見る所もたくさんある。五能線に乗って世界遺産の白神山地、十二湖を見た。能代地震により川がせき止められ 33 個の湖ができたが、12 個に見えるとして十二湖と名付けたという。中でも青池が有名であるが、なぜ青いのかは解明されていないという。

天気がよければ、竜飛崎から北海道が見えるらしいが、あいにくの空模様で霧も深く、北海道が見えないだけではなく、「やませ」のおかげで寒かった。

下北半島では、仏ケ浦、大間崎、恐山とまわった。本州の最北端大間崎では、マグロではなく「うに」の季節だということなので「うに」を食べた。

日本三大霊山(高野山、比叡山、恐山)の一つ恐山では三途の川を渡った。三途の川は浅い所、深い所、中間の３通りがあり、行いの良い人は浅い所、悪い人は深い所を渡らなくてはいけないそうだ。バスツアーでどこを渡るのがよいか迷うところかもしれないが、いろんな人がいる(?)のでシャーナイ(車内)というところか。

三陸海岸では、「あまちゃん」で有名な三陸鉄道に乗り、バスで浄土ケ浜まで行き昼食・休憩をとった。途中、北山崎で絶景を堪能した。北山崎の展望台は海抜 150m 程度であるが、眼下に雲海が広がり、かなたに太平洋を望む景色であった。ガイドもこのような景色は見たことがないとのことで、雨がふったり、陽がさしたりの合間の貴重な景色に出会えたらしい。いつお迎えが来てもおかしくない人たちのそれらしい観光コース(仏ケ浦、恐山、浄土ケ浜)に絶景が用意されたようだ。やっぱりいつお迎えがきてもということであろうか・・・。もう少し、この世に未練があるような気はするのだが・・・。

○こまちなみシリーズ②

金沢市は「こまちなみ保存条例」を制定し、「まちの歴史を色濃く残した、ちょっとした良い町並み」を「こまちなみ」として守り、育て、その雰囲気を生かした風格あるまちづくりを進めている。そこで、これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探訪し、シリーズで紹介する。

可部夢街道が危ない！

可部の町並み

コミュニティサロン可笑屋

広島市安佐北区可部では毎年１０月頃、旧雲石街道一帯の古い町並みを散策するイベント「可部の町めぐり」があり、**「可部カラスの会」**を中心としたまちづくり市民グループが実施している。

ＪＲ可部駅から約１キロ北の旭鳳酒造までの街道沿いが会場で、江戸後期から昭和初期にかけて建てられた古民家や商家が多く残っている。可部の町は出雲・石見をつなぐ分岐点に位置し、太田川と三篠川の合流点でもある。戦国期には高松城の城下町として発展し、近世以降は舟運業や鋳物業、山まゆ織、酒・醤油の醸造などが盛んで、物資の集散地として商家町の性格を強めた。

市重要有形文化財の鉄燈籠や城下町の防御のための「折り目」と呼ばれる道筋、商家に残る格子や卯建など歴史と文化を感じさせる。この地区を「可部夢街道」と名付け、歴史散策に訪れる人も増え、ガイド役を務める住民グループ「可部夢街道もてなし隊」も活躍している。

しかし、町のメインストリートが国道５４号線に移って以来、商店の移転や人口の流出を招き、地区全体の空洞化が進行している。空き地が増え、駐車場に変わり、周囲にプレハブ風のアパートが建ってくると夢街道の趣も壊されていく。

道路は車がスピードを上げて通過し、安心して歩けない。歴史的な町並みを残し、散策者を増やすためには早急に対策が必要だ。可部バイパスも開通したことだし、通過交通は遮断して生活車のみの一方通行とし、歩行者優先の歩いて楽しい夢街道にできないか。また、「可部夢街道町並みづくりガイドライン」も作られているが、道路沿いの建物は地区住民の同意による建築協定等を結んで、旧街道の面影に少しでも戻す努力をして欲しいと思う。

古民家を改装した「コミュニティサロン可笑屋」がまちづくりの拠点となり、その周囲に残る古民家を中心として夢街道の復元が広がることを期待したい。

（編集委員　瀧口信二）

可部カラスの会　とは

サッカーは『ヤタガラス』、まちづくりは『可部カラス』

まちづくり市民グループ『可部カラスの会』事務局の寺本です。少し古い話をさせていただきます。今から２７００年前、神武天皇は高千穂から東征を始めます。途中、広島には７年間滞在されました。その折に可部で風待ちをされたのですが、その時、舟をつながれたのが可部の船山、そこを今も流れているのが帆待川です。

こののち、神武天皇は大和に向かうのですが、その時、神武天皇を導いたのが八咫烏です。ＪＦＡ（日本サッカー協会）のシンボルとしてご存じの３本足のカラスです。この八咫烏のおかげで日本の国づくりが導かれたのです。

さて、一方の可部はどうなったのでしょう。高野山の荘園として開け、毛利の家臣熊谷氏の高松城の城下町として発展し、その後は中国山地から流れ出る３本の川の合流点として、繊維・鉄・食品・物流といった産業で栄えました。この時、可部の商人達がとても賢く商売をしたので、『可部のカラスは腹まで黒い』という悪いことわざが定着してしまったのです。

その後、可部町としてまちづくりを進めてきたのですが、広島都市圏の拡大に伴い、昭和４７年、広島市に合併されます。ここから可部は可部で無くなっていきました。ただの交通渋滞の激しいベットタウンになってしまったのです。培ってきた歴史や文化はあっという間に忘れ去られていったのです。

その可部を何とかしようと、平成９年に立ち上がったのが『可部カラスの会』です。書面の関係で詳しい活動内容はＨＰにゆずりますが、会費も会則も無く、自由に楽しく活動を継続させ、可部のアイデンティティの復活に取り組んできました。

評価は皆さんにお任せしますが、たしかに可部の町は変わりました。可部の市民は変わりました。そして今、可部線の延伸をビッグチャンスとして、さまざまな取り組みを展開しておりますので、皆様のご声援、よろしくお願いします。

可部カラスの会ＨＰ　http://www.megaegg.ne.jp/~kabekarasu/

可部線復活プロジェクトＨＰ　http://jp-site.net/nagai/futatabitop/futatabitpo.html

○*読者からの投稿その１*

投稿者　石原　滋（広島市民）

分断され、葬り去られようとしている分身を取り戻せ。

今、広島平和記念公園を「真の完成」へと導くことができる最後のチャンス。

素晴らしい平和大通り、素晴らしい中島の平和記念公園、しかし、何か足りないものがある。それは平和記念公園の分身＝中央公園地区の平和記念公園である。

当初計画された平和記念公園構想は中島地区（現平和記念公園）と中央公園（基町の旧軍用地）計 85 ヘクタールを一体とするものであった。浜井市長の相談を受け丹下健三氏がこしらえた平和記念公園計画図（昭和 26 年 1 月 4 日・広島市役所建設局計画課）がある。その計画図には平和記念資料館→原爆死没者慰霊碑→原爆ドームを一直線に貫く軸線が城北通りまで貫かれ、競技場をメインに爽やかな川風渡る広々とした公園が描かれている。もしも、その計画図が実現されていたら、広島は今より品格高い街になっていたことだろう。現状の平和記念公園は分身＝中央公園地区を分断され、細切れにされ、創造力を奪われた仮死状態なのだ。

「平和都市建設法制定記念号」と銘打たれた 1949 年度（昭和 24）の広島市市政要覧に「中島、中央両公園を一括して平和記念公園として（中略）世界平和に寄与するとともに、国際人交歓の一大中心地とする計画である」と記されている。まさしく、これがヒロシマの理念であり、本来具現するべき平和記念公園の真の姿なのだ。しかし何故、中央公園地区の平和記念公園は作られなかったのか？そして忘れ去られようとしているのか？その理由として、基町の戦災者向けバラック住宅、抽選に漏れた者がやむなく建てた川土手の不法住宅（原爆

スラム）の問題、そして食うや食わずの時代で予算がなかったこと。これ等のことは皆さん周知されていると思います。しかし、もう一つ隠された大きな理由があります。それは終戦間もなく、日本国民があずかり知らぬところでアメリカとアメリカの工作員となった日本人によって巧妙に行われた「核兵器の隠れ蓑」としての「核容認工作」です。1954.3.1 アメリカによるビキニ環礁水爆実験に対し急激に増幅した日本の反核運動と反核感情を抑え込み、態勢を逆転させようとアメリカ政府・中央情報局（CIA）は日本人工作員を背後から操作・支援しテレビ局を開設。そのテレビをフル活用して「原子力平和利用＝Atoms for Peace」をキャッチフレーズに「原子力発電啓蒙」の大々的なプロパガンダを行った。あろうことかその中核的ターゲットにされたのはヒロシマだった。1956.5.27／「原子力平和利用博覧会」、1958.4.1／「広島復興大博覧会」の「原子力平和利用展示館」として、平和記念資料館を二度にわたりまんまと利用され、汚された。いつの間にか「原子力平和利用＝Atoms for Peace」に幻惑された広島は、中央公園が平和公園の分身であることを忘却し、原爆ドームの正面にアメリカ・スポーツの代表・ベースボールスタジアム「広島市民球場」を、その横には広島県物産陳列館「現・原爆ドーム」の関連施設である「広島商工会議所」ビルを、平和公園と中央公園を分断する壁のように建ててしまった。そして今、中央公園が平和公園のための場所であることを知っている人はほとんどいなくなってしまった。原爆投下、敗戦、そんな凄惨な状況の中このようなことがあったとは、当時の広島市民が知る由もないのは致し方ないことです。しかし、今は違う。先に述べたような様々な障害も無い。「中島、中央両公園を一括して平和記念公園として（中略）世界平和に寄与するとともに、国際人交歓の一大中心地とする計画である」この原初にして最もヒロシマに相応しい理念を具現することが出来るはずだ。

市民球場が移転し、広島平和記念公園の分身を取り戻すための「要」となる場所が原爆ドームの前に開け放たれたのだ。

現在、広島市が「賑わい創出の場」だとか言っているが、あまりにも軽々しく嘆かわしい。市民球場跡地にだけ近視眼的にとらわれ、場当たり的に対処するのではなく、今一度「広島平和記念都市建設法」の理念に立ち返り、平和公園としての中央公園全体を見渡し、長期的プランを精錬してほしい。

ヒロシマは「日本のヒロシマ」ではなく「世界のヒロシマ」だ。我々が思っているより世界は高い意識レベルでヒロシマに関心を寄せている。昨年５月に発表された世界最大の旅行サイト「トリップアドバイザー」の「外国人に人気の日本観光スポット 2013」の第１位が広島平和記念資料館、2014 も第２位、そしてその７割超が欧米人というのも興味深い。日本の都市の中で一番広島が好きで何度も訪れている外国人女性は「ただ歩いているだけで幸せな気分になれる」と言う。そんな力があるヒロシマに世界中の人々を招き入れ、生活していただきながら平和活動をしていただく。《国際平和機関（創設）誘致》。その活動は、ヒロシマに世界を見渡せる視力を与え、意識を高め拡張し、沢山の智慧を与えてくれる。そしていつか、不可能とも思える核兵器廃絶・世界平和を実現する叡智を授けてくれるだろう。平和記念公園の分身をそんな場にしたい。これ以上ヒロシマは汚されない、そして自らを汚さない。惑わされることのない澄んだ瞳を持ち、凛と立つ足腰を持ち、誇り高き志をもって世界平和実現に向け活動する清々しい青年のような、真の国際平和都市になってほしい。

近未来ヒロシマへ、私の願いです。

□編集後記

２０１２年９月創刊から次号で早３年目を向かえるところとなった。振り返ってみると、本当にたくさんの方に登場頂いた。今では約５００名に読まれている。少しは、お役に立っていればいいと考えている。今号では、まちづくりの名の下に多岐にわたる分野の方の記事が並び、読みどころのある楽しいものとなっている。

『♫♫トンボのメガネはくるくるメガネ、大きいお空を見てるからぁ見てるからぁーーー♫♫』

まちづくりは、色々な分野からとらえ、それらを総合化するところから始まる。

いわゆる″複眼の思想″である。
　一歩ずつではあるが、次第に近づいているという実感がある。

（編集委員　前岡智之）

＊ひろしまのまちづくりについて

皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！

（投稿は５００字程度以内でお願いします）

編集委員

石丸紀興　広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視　心豊かな家庭環境をつくる広島２１理事
瀧口信二　広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷　章　ガリバープロダクツ代表
前岡智之　中国セントラルコンサルタント代表
三宅恭次　元中国放送役員